新　刊

□西口親雄：**森のなんでも研究**．B6．238 pp．2002．￥1,900+税．八坂書房．ISBN 4-89694-491-7 C0045.

1部．ハンノキ物語と2部．NZ森林紀行より成り，前者が主体である．著者は大学演習林に勤務し，永年にわたる実地体験と，とらわれない自然観察の上に立って，ハンノキばかりでなく，ハルニレ，コナラ，ブナなどの落葉広葉樹林の遷移にかかわる菌類や昆虫の働きを考察したものである．

森林の遷移の過程は，落ち葉や倒木の分解が起らないと進行しない．これには菌や昆虫が主役となる．そしてその過程は，葉がまだ樹上で生きているときから始まっている．葉が地上に落ちてから菌類によって分解されてゆくというのは常識的なプロセスだが，その前に，樹上で葉がまだ生きているうちに，すでに内生菌による侵入が始まり，いわゆる病葉として認識される．樹種と内生菌は1:1に対応しており，一つの樹種が多種類の外生菌や昆虫や鳥によって食害・分解されるのとは事情を異にしている．そして落葉した後は，多種類の菌や動物による分解が進む．一方，材の方はすでに感染した腐朽材から，風や虫によって胞子が運ばれてくるが，菌の胞子はn世代なので，別な菌糸と合体しなければ繁殖できない．一方，材の主成分はセルロース，リグニン，ヘミセルロースで，セルロースの分解は赤腐れ，リグニンの分解は白腐れとよばれるが，リグニンを分解しても菌の養分としては役立たない．結局のところ，リグニン分解菌は，リグニンを取り去った後のセルロースを目当てにする菌で，赤腐れ菌よりも進化が進んだものだろう．胞子を運ぶはずのキノコムシやキクイムシは，どうやって目的の朽木に到達するのか等々，いろいろな考察が目まぐるしく提示される．これらのプロセスはまだ定説化されていないので，著者の自由奔放な思いつきが次々と展開されてゆく．「なんでも研究」という題は，このあたりを指しているのだろう．言われてみると，分からないことだらけである．われわれが植生の遷移を説明するとき，こんな裏話をしていたら，一日かかっても終わらないだろう．とにかく，判ったようなつもりで説明していた常識に，自信をなくすこと請け合いである．著者自筆のキノコや昆虫の図が各所に挿入されているのも楽しい．2部はニュージランドで *Nothofagus* 林を見てハンノキのルーツを考えたという紀行文である．

（金井弘夫）

□星野卓二・正木智美・西本眞理子（画）：**日本カヤツリグサ科植物図譜．Illustrated Sedges of Japan**. B5. 778 pp. 2011. ￥20,000+税．平凡社．ISBN 978-4-582-53522-8 C0645.

カヤツリグサ科はイネ科とともに，種類が多く，同定も分類もむつかしい植物群なので，全体をカバーする使いやすい図譜が待たれていた．本書では1種類を対面2ページに納め，偶数頁に解説，奇数頁に線画が示されている．場合によっては二種類のところもある．Carexが312種類，その他の属が161種類，合計473種類で，日本全域の種類を網羅している．線画はすべて西本氏の作品で，できるだけ生品を用いたとのこと．全形，花序，鱗片，果胞，瘦果などが丹念に描かれている．岡山県カヤツリグサ科植物図譜 (2002) 以来続けられてきた，著者らの地道な努力の成果である．

はじめに，この科の植物の同定に必要な各部の形態とその名称の説明があり，続いて属の検索表，スゲ属の節の検索表，スゲ属の種の検索表，スゲ属以外の属・種の検索表が続く．54～747頁が図譜，以降が文献および索引である．図譜の解説は簡潔で英文も添えられているので，海外での利用にも有用だろう．簡潔なだけに偶数頁には空白部分が多いが，これは利用者が書き込みをするのに使えるので，無駄なスペースとは思わない．ここへビッシリ書き込むような利用者がいれば，将来の改訂増補に貢献するだろう．本や図鑑は「神聖で汚すべからず」という作法があるけれど，研究の進展に役立つなら，個人のノートに書かれてしまい込まれるよりは，本への書き込みは貴重な情報である．書き込みで「汚された」本は古書価格が落ちるそうだが，今後電子出版の隆盛と共に「新品同様」の古書の価値が失われるのに対して，「書き込みのある古書」の価格は高まるだろう．

説明文にはそれぞれの器官のサイズの範囲が記されているが，部分図にはスケールバーがあるとよかったのではないか．植物画の傾向として，スケールバーは美観を損なうためか敬遠されている感じだが，研究用としてはあった方がよい．図にはその標本の産地，採集月日（年は無し）が記されているが，標本番号や採集者や保管場所まで含めて，標本ラベルのデータが元のまま記されてい

る方がよかったと思う．そうすれば後日の研究結果を標本と比較検討することができる．また図番号がついていると，引用が楽だと思う．本書の場合，図番号はそのまま植物番号としても使えるので，便利なのではあるまいか．（金井弘夫）

□野田坂伸也：**木を選ぶ・野田坂造園樹木事典**. B5. 710 (140+161+409) pp. 2011. ￥16, 000+税. アボック社．ISBN 978-4-900358-68-3 C3045

索引編 (140 pp.)，選択編 (161 pp.)，事典編 (365 pp.)，解説編 (43 pp.) の四部より成る．

-18- ～ -22- 頁（この表現については後述）に，「この本の見かた」として，適木をえらぶ（選択編），1612 種を調べる（事典編），Web 植物辞書花ペディアでカラー写真などを見る，という図解説明がある．

園芸関係の事典だから，きれいなカラー写真がたくさんあるだろうと思ったら，あてがはずれて一つもなく，写真や植物画はすべてモノクロムである．その代わり事典編では，種類ごとに示される 6 桁の「花ペディア番号」や属ごとに示された二次元バーコードを使って，出版元のアボック社が運用する Web 植物辞書「花ペディア」に接続し，カラー写真や詳細な解説などを無料で検索，閲覧することができる．またすべての植物名には，6 桁の種番号（事典番号）が与えられていて，事典編では植物の配列はこの事典番号順になっている．

索引編は，著者が選んだ代表的樹木 200 種類が和名 50 音順に示され，選択編および事典編の頁数と花ペディア番号が示されている．それから，本書に現れるすべての植物の和名（学名つき），別名の索引と，学名，英語名（和名つき）による索引がある．

選択編は，現場の条件や目的に応じて，樹高，生け垣，花期，葉色，樹形など，様々な特性をもつ植栽樹木を選ぶための一覧表で，5 部に分かれていて，著者の意見が色濃く反映されている．

事典編は本書の主部で，1,612 種類が学名順に並んでいる．記述は従来の図鑑・事典に見られる紋切り型の堅苦しいものではなく，造園の立場からの主観をまじえた柔らかい随筆的文章で，読みやすのでつい読んでしまう．蝶の食草の話しまである．本の表題に著者の名が入っているのも，こういうユニークさを主張しているのだろう．この分野のことはよく知らないが，造園ばかりでなく，分類や生態の人にも有用と思う．

異なる頁づけが三通りあり，頁下縁のナンバーの表示位置とスタイルが次のようになっている．名前でさがす（索引編）では，中央に - - つきで 1-140 頁．適木を選ぶ（選択編）では，端に修飾ナシで 1–161 頁，1612 種を調べる (事典編) と理解を深める（解説編）では，中央に [ ] つきで 1-409 頁である．これを頭に入れておかないと，迷子になりかねない．それと，引用するときに，いちいち - - や [ ] を付けたり付けなかったりせねばならない．そういう引用を含む報文を受け取った編集側では，- - や [ ] の意味がわからず，「余計なもの」として削ってしまいかねない．この紹介文の最初に「-18- ～ -22- 頁」と書いてあって「おかしな書き方だな」と思われるだろうが，「18 ～ 22 頁」は別な所に存在しているし，「[18] ～ [22] 頁」もまた別に存在するのである．こういう頁分けは本書の中では有用かも知れないが，すべて同じスタイルの通しナンバーにしても，特段の不便さはないように思う．索引編の中でどの編に属する頁であることを区別したければ，書体を変えて表示すれば足りるのではなかろうか．

本書は Web 事典と密接な連携を図るために，事典番号，属番号，種番号，頁番号，花ペディア番号など，いろいろな数字コードがあらゆる場面に現れる．慣れてくればこれらのコードを利用して，本書の中ばかりでなく，インターネット空間を飛び回って，大いに知識を拡げることができるだろうが，初めのうちはとりつきにくく感じる人もいるだろう．むかし「専門用語研究会」という会合に出たことがある．種族や業種や居住地が違えば，方言が分化してくるし，漁師と農夫とやくざの使う言葉では単語のみかけは同じでも，意味・内容は違っていて，それが互いの集団意識を強めているという．そういういろいろな意味での仲間うちのみに通用する特有な言葉や解釈のことを「専門用語」と呼ぶ．そういう専門用語が社会の交流と共に他集団にとりこまれ，たとえばやくざ言葉の「ヤバイ」が，戦後の混乱期を経て一般用語になって行ったように，過渡期が必要である．高度に分化した数字コードは，ソフトやデータを日常扱うエンジニア的な人達には朝飯前だろうが，あまりそういうことに深入りしない日常を過ごす人たちには，すごく近づき難い印象があり，制作側，編集側がよほど用心しないと，折角の良書が敬遠される原因となり得るおそれがある．こ

ういうことはおそらく初めての企画だろうから，「こんな簡単なコードくらいこなしてくれないと...」と言わずに，次第に改善を図ってほしい．

（金井弘夫）

□宮城植物の会：**宮城県維管束植物チェックリスト 2011**．A4．89 pp．2011．no price．同 会．ISBN no number.

宮城植物の会は2001年に宮城県植物目録2000を刊行し，コケ植物631種，シダ植物221種，種子植物2,181種を記録している．本年，会の創立40周年を記念して，新たな植物誌の編纂にかかろうとした矢先に東日本大震災に襲われ，作業は一時中断したが，年末には再開する予定とのことである．本書はその作業において，調査計画を勘案する資料として作られたと記されている．

これまでに記録された植物が科名順，学名順に配置され，和名，所産地域，関連文献掲載頁が示されている．所産地域は奥羽山脈区，仙台平野区，北上区，阿武隈区，島嶼区の五つで，それぞれ資料の有無が記されている．

チェックリストは作業用のノートだから，地域区分はもっと細かい方がよかったのではないか？長野県植物誌編纂の途上，同様なチェックリストを何度か作った．長野県では市町村単位に担当者がいて，資料の充実と検討に当たっていた．種類の有無が市町村単位で判るようになっていれば，「こんな植物が俺の町にないはずはない」と注意するようになるし，「隣の村にこんなに多くの種類が記録されているのに，うちの町は少な過ぎてみっともない．教育委員会が少し調査費を出してくれれば...」というようなたねになるのではなかろうか．その成果は，同書の1,535頁に一覧できる．中には，チェックリストから自分の町の植物目録を作ってしまった人もいたということだ．本書の地域区分は植物地理的にはもっともだが，利用者の縄張り意識を刺激しないので，チェックリストとしては迫力が不足だと思う．これからスタートする事業なのだから，まだ工夫の余地があるだろう．

（金井弘夫）

□副島顕子：**Plant Dictionary 植物名の英語辞典**．A4．2011．￥3,000＋税．小学館．ISBN 978-4-09-506702-5 C0582.

Plant Dictionaryのタイトルからは Mabberley の Plant-Bookに似た内容を思わせるが，本書の内容は日本語の表題部分「植物名の英語辞典」に一致するもので，植物の英名辞典である．造本はコンパクトで辞典として使い易い．

人は生き物にそれぞれ特有の名前をつける．各民族の言葉には特有の生物名があり，その中には広く流布する一般名があり，限られて地域の方言もある．名前を付けてそれぞれの民族が多様な生き物を知覚している．英語を使う人は地球上に広く生活しているから，広い地域の植物に英語名が付けられている．地球上のほとんど全ての種類に英語名があるのではなかろうか．頭に土地の名を付けて英名としたJapanese apricot ウメ，Japanese cedar スギのような日本植物の英名も本書では13個採っているが，これはごく一部だろうし，日本名からの英語名も多い．日本語由来のsatsuma は sweet potato かと思ったら，satsume mandarine のことであるという．英語植物名の主なものは英和辞典にも収録されているが，大きな英和辞典であっても収録数は僅かである．

著者は2480個の英語名を収録したという．これでもこれ迄になく多数であり，試みにいくつか引いてみると十分なように思える．登載された植物名は一般名，学名に由来するものが多いが，聖書，文学作品など多くの文献が参照されていて，conifer, fern, grass などの一般的な総称名も含まれる．それぞれについて見出しと同名あるいは関連の植物について参照でき，分類，形態，用途・文化背景，語源などが簡潔に説明されている．最後に13頁にわたる索引がつく．索引は和名英名の組み合わせで（例えばイチョウ ginkgo），本文の英和辞典に対して和英辞典となりそうだが，索引の項目数は本文の英名項目数よりも少ないので，この使い方はお勧めできない．例えばイチョウの英名 maidenhair tree は本文にあっても索引になく，ミカンは mandarine と呼ぶことが多いと思うが，本文にはその説明があっても索引では orange だけである．索引に和英辞典の機能を果たさせることができたら，さらに便利だったろう．

（大橋広好）